19日　月曜

マルコ

15:16 兵士たちは、イエスを中庭に、すなわち、総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。
15:17 そして、イエスに紫の衣を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、
15:18 それから、「ユダヤ人の王様、万歳」と叫んで敬礼し始めた。
15:19 また、葦の棒でイエスの頭をたたき、唾をかけ、ひざまずいて拝んだ。
15:20 彼らはイエスをからかってから、紫の衣を脱がせて、元の衣を着せた。それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。
15:21 兵士たちは、通りかかったクレネ人シモンという人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。彼はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。
15:22 彼らはイエスを、ゴルゴタという所（訳すと、どくろの場所）に連れて行った。
15:23 彼らは、没薬を混ぜたぶどう酒を与えようとしたが、イエスはお受けにならなかった。

恐ろしい十字架刑ではありますが、聖書ではそれを簡潔に記述しています。特にマルコは記述が短いのですが、これには神様の御思いがあるのでしょう。その残酷さや悲しさを単に感情的に伝えるのではなく、主のなさったみわざを伝え、それを読む私たちが聖霊の働きによって、理解し感じることが主の意図されたことではないでしょうか。少なくとも聖霊によらなければ、これは単なる単純な記録です。また聖霊によって読むなら、主イエスの激痛を感じ、叫び声が聞こえてくるのです。
主イエスを愛し、その御思いに少しでも近づきたいという思いでこの箇所を読みましょう。そしてその一つ一つの苦しみが、自分自身のためであったことを覚えましょう。

Bible Reference 聖書の記述

「紫の衣」は高貴な人が着るものでしたが、ここでは明かにイエス様をからかい馬鹿にしたものです。王と自称してもこの有様だと言わんばかりです。その極めつけとして、高貴な人が被る王冠を、事もあろうにいばらで編んで、これを頭に食い込ませました。数センチもある長い棘は頭全体からこめかみまで食い込みました。その顔は血だらけになったでしょう。
そのような中でクレネ人、シモンはイエス様をお助けすることができました。はじめは「むりやり」に背負わされたのですが、最後の十字架のところまで負い続けたのです。これも御父なる神様の導きであると考えられます。私たちもたとえ不本意な中で背負わされた重荷であっても、主イエスの役に立てるなら…と思いを新たにし、十字架を負い直してみましょう。必ず新しい喜びが生まれるはずです。
「没薬を混ぜたぶどう酒」は十字架の苦しみを少しでも和らげるために与えられたものですが、イエス様はそれを拒否なさいました。苦しみを余すところなく受けるためです。イエス様はそれほどの覚悟を持って私たちを救ってくださったのです。どんな時でもどんなことでも、イエス様は愛を差し控えるような方ではありません。私たちは自分が主イエス様の無限の愛に包まれていることを、常に感じて生きるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？